

コーチング学研究投稿規定および投稿の手引きの改訂に関するお知らせ

コーチング学研究編集委員長 関子浩二（筑波大学）

8月29日、日本体育学会の際に開催されました総会において、コーチング学研究の投稿規定および投稿の手引きが改訂されました。コーチング学研究のオリジナリティーや研究論文のあり方については、学会大会のシンポジウム、理事会または編集委員会などを通して、数年間に渡って継続的に議論しました。それらの経緯と結果をもとにして、本誌に掲載される論文の種類を、表紙裏の「投稿規定」および128～133ページの「研究の手引き」のように改訂致しました。会員の皆様方にご理解頂くとともに、変更点を周知頂くようお願い申し上げます。主な変更点は、原著論文を論考、実践論文、事例研究の3種類に定義するとともに、新たに実践報告（Case Report）を設けたところです。それでは変更点についてご説明致します。従来までは、原著論文と実践研究を同列に記述し、2つは異なるものとされてきました。しかし、本誌は「コーチング実践に資する」という目的を持った学術誌であり、「原著論文すなわち実践研究のはず」という理由から、2つを実践論文という1ジャンルにまとめました。そして、この実践論文は、スポーツ実践や関連事象について、実験や各種調査などによる仮説検証を通して、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、コーチング学の発展に直接的に寄与するものとししました。また、原著論文には論考と事例研究というジャンルを新たに設けました。論考とはコーチング学における種々の問題に対して、明快な論理展開を内在させながら新しい視点を導き出し、コーチング学の発展に直接的に寄与するものとししました。つまり実験や調査などのデータをエビデンスとした展開ではなく、論理的な思考の展開をもとにして新知見を探求・創造した論文のことを意味しています。この種の論文はこれまでは総説に位置付けられていました。しかし、今回の改訂では、総説は文献総覧を中心に当該研究視座の体系に関する提示を主眼としていることに対して、原著論文の中の論考は、論理展開をもとにししながら新知見の提示を主眼としていることとして双方を区別しました。また、事例研究とは、コーチング学における種々の問題に対して、実際に生じた事例を蓄積し、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、コーチング学の発展に直接的に寄与するものとししました。ご理解頂きたい点は、原著論文の中の事例研究は単なる事例の提示に終らず、そこから一步発展し事例を通して個人を越えた普遍的な新知見を探求・創造した論文でなければならないことです。次に、新しく加わった実践報告（Case Report）について説明します。これについては、コーチング学における種々の問題に対して、現場で実際に行った事実を事例として正確に記述し報告したものであり、コーチや選手の学びに直接役立つ内容が明確に記述されていることが必要になります。すなわち、日々行われる実践で生じた問題解決過程を記述し報告することになりますので、新規性と普遍性を問うことはありません。医学や心理学における臨床、看護学や介護の世界では、実践報告を非常に大切に発展させており、提示されたケースが学びを活性化するとともに、それらのケースが蓄積されて大きな成果に繋がっています。コーチング学研究においても、この実践報告を大切にコーチや指導者の学びに役立てるとともに、多くのケースを蓄積して新たな発見や創造に繋がればと思っております。

会員の皆様には、「投稿規定」および「研究の手引き」が新しく変わったことを十分にご理解頂くとともに、12月1日からはこれにもとづいてコーチング学研究への投稿を行って頂くことをお願い致します。

